あつてヘッス、ヘルッカ、デューリングの人々がそうである。ニイチエも此のうちに數へることが出來る。以下、簡單に此人々の思想を觀察する。

（一）スチルナー派

スチルナーの大膽な、無道德の、官能主義的のアナルキスムは當時の急進主義にも贊同者を見出し得なかつた。殆ど唯一人の祖述者としてユリウス、フアヘル Julius Faucher（1820—1878）がある。彼は一八五〇年に伯林で一夕刊新聞を發行してスチルナーの所謂「福音」を宣傳し始めたが、勿論直に禁止せられた。彼は大陸を去つて個人主義的色彩の强い英國に赴いた。スチルナーの著書「個我と財産」は單に讀み物として吾人の前に在るのみである。

（二）プルードン派

スチルナーに反してプルードンは影響が多かつた。ライン諸邦や瑞西には其思想を祖述する人々が居た。其重なるものは次の人々である。

（A）カール、グルン Karl Grün（1817—1887）

カール、グルンはウエストフアリアで生れた。最初、ボン及び伯林に學び、コルマールで教師生活をやつたが、マンハイムに急進的な「マンバーム新聞」を興し、官憲の忌諱に觸れ、バーデン及びバイエルンから追はれた。一八四四年に巴里に行つてプルードンに逢ひ其感化を蒙つて歸獨した。其滯在の結果として現はれたものが「佛白の社會運動」(Die social Bewegung in Frankreich und Belgien 1845)である。後にプロイセンの國民議會に選ばれたが、フアルッの暴動に加つたものとして八ヶ月の禁錮に處せられた。其後は伊太利、白耳義、ライン諸邦、維納等を轉々し不遇の中に死んだ。

グルンはプルードンの使徒であるが、彼の思想はプルードンの教理以上に出た。彼は後に述ぶるヘッスと共に最近代の共產的アナルキスムの先蹤者である。彼には社會の目的を以て萬人の幸福な消費に在りとする思想が明かに見ゆる。（前掲書

四三三頁以下）グルンはプルードンの「組合が發達して勞働者の數が增加し吾人の職分が縮小するに從つて種々の相違が減退する」との考へを非難してゐる。なるほど生產能力の相違は減退するであらうが、自然の天分の相違は消滅するものでは無い。從つて各人の幸福は消費の社會的自由に依つて保證せらるべきものであつて、生產自身から割出されるものでない。否、消費の平等といふ觀念があつて始めて生產の平等といふ觀念が生じてくる。各人に對して其需要に應ずる消費を許してこそ初めて萬人の幸福は確立する。而し近世科學の進步は生產を益々旺盛ならしめるが故に生產物の不足となるが如き憂ひは毫も無いのであると。

グルンの以上の思想は明かにクロポトキンの思想を示唆すると言つて差支へない。

（B）キルヘルム、マアル Wilhelm Marr

キルヘルム、マアルは一八一九年五月六日にマーグデブルグに生れた。最初、

商人となつたが、一八四一年に瑞西に赴いて以來は全く政治家著述家の境涯に入つた。初めワイトリングの共產主義を奉じたのであつたが、自分の個人主義的見解から（彼もフオイエルバッハの崇拜者の一人だつた）全く是を捨てゝプルードンに走つた。彼は瑞西の職人組合に傳道を試みた。彼は國家、社會、敎會の權力的要素を否定した。一八四五年には彼の新聞は停止を命ぜられ其身も瑞西を去らねばならなかつた。一體、當時の獨逸では急進思想が急激に勃興したのであつたが、プルードンの影響は中々多かつた。マアルも其一人である。彼の著書は「瑞西に於ける青年獨逸」（一八四六年）といふので、相應に反響を呼んだ本である。

（C）アルツール、ミユールベルガア Arthur Mülberger

此人は一八四七年に生れた。職業は醫者である。七〇年代頃から社會問題に關する思索を發表した。其中心の思想はプルードンである。一八九三年には在來の論文を集めて「プルードン研究」(Studien, über Proulhdon Ein Beitrag zum Verst-

ändniss der sozialen Reform.) を書いた。此書は獨逸文にて書かれたプルードン研究の文献中、カール、ディールの著書と共に最も傑出せるものである。彼はプルードンを單に研究したのではなく根本的に體驗したのだ。然し實行運動には手を出してゐない。

（三）獨立のアナルキスト

他人の思想の祖述者でない、獨立のアナルキストとして、ヘッス、ヘルツカ、ヂューリング等を擧げることが出來る。

(1) モーゼス、ヘッス Moses Hess

ヘッスは一八一二年にボンで生れた。初め商人となつたが、ヘーゲル哲學に醉ふて著述家の群に入つた。其思想の傾向はワイトリングとプルードンとの融合と見ていゝ。四十年代に「行動の哲學」といふのを書き、「社會の鏡」といふ雜誌を經營して自家の見解を發表した。一八七二年に人々から忘れられて死んだ。

ヘッスの特徴はプルードン以前に、プルードンの說に類する財產論を說きアナルキイの世界を描いたに在る。彼は精神生活と社會生活とに於て……分子を廢し各人が自立的に行爲する世界を希望した。……も敎會も此意味に於て排斥される。人間の行爲の價値は各人の內部的欲求の表はれでなければならぬ。アナキイの世界に於ては各人の勞働は其れ自身のうちに報酬を含むのであつて、各人は思ふ儘の勞働を爲すことが出來る。「理性的（フエルヌンフチゲルワイゼ）」に組織された社會とは斯る社會を指すのである。――ヘッスは實現手段としては敎育組織の改善、普通選擧の施行、國民工場の設立といふやうな平凡なことを擧げた。

（2）テオドル、ヘルツカ Theodor Hertzka

ヘルツカハ一四五年にブタペストに生れた。法律學を學んだ後、新聞生活に入つたが大に成功し七〇年代には「新自由新聞」の記者となり、一八八〇年には維納で「アルゲマイネ、ツアイツング」を設立し、一八八九年から「國家學經濟學

雜誌」の發行者となつた。一八八九年に「自由國、未來の社會相」(Frieland, ein sociales Znkunftsbid) を出した。此書は一種のユトピヤ的物語であるが、非常の評判をとり、續々熱情的な實行運動が試みられた。彼のアナルキスト思想は此書のなかに遺憾なく現れてゐる。

「自由國」は一の共同團體である。そこには主人も奴僕も無い。そこには自由なる勞働者が有るのみである。財産家といふものもない。生産費料は空氣の如く何人にも屬しない。其管理にも勞働者の組合が當る。各人は自己の勞働の生産物について全收權を有し各人の屬する組合が其分配に當る。如何なる組合に加入するも脱退するも各人の自由である。各人は自由に勞働を撰擇することが出來る。

「自由國」では精細な經濟統計を作製するから各人は團體内の需要及び供給を精確に知ることが出來る。各人は無利子で生産資料を使用する。自由の社會的事

業は一定の時期に選擧される役人が實行するが、同時に監督の役人も選まれて是を監視する。すべて公開といふことを原則とし一切の秘密主義を廢する。

「自由國」の費用は團體員すべてが負擔し其純收入に應じて精算される。其支出は主として社會的事業に向けられるのであつて、六十歳以上の男女や小兒や病は無者償で養はれるのである。反之、もはや司法や警察や軍隊……。自由國ではもはや……も無いのであつて、爭議の發生した場合には其決裁人が選まれ、口答にて其れを判定する。

「自由國」一卷は讀み物として面白きのみならず、特定の經濟組織の企圖として價値を持つてゐると考へる。然し要するにアナルキストの贅澤な空想である。

(3) オイゲン、ヂユーリング Eugen Dühring

ヂユーリングは一八三三年にベルリンに生れ法律學、哲學、經濟學を學んだが、一八六四年から一八七七年までベルリン大學の私講師をやつた。「武器、資本及び

勞働」「國民經濟學及び社會主義の批判的歴史」其他多くの著書がある。彼はエンゲルスから酷くやられたが（エンゲルス「デューリング駁論」參照）今日でも相應に信者のあることを或る教養ある獨逸人から聞いた。

彼は今日の國家を以て「暴力國家（ゲワルトスタアト）」であると考へる。凡そ在來の社會は「二個の人」Zwei männer といふ概念を以て解くことが出來る。第一の人は他の人を壓制し、暴行し、自己の爲めに勞働せしむるものであり、第二の人は第一の人の爲めに勞働を絞取せらるるものである。社會生活の區別、政治的特權、財産、資本、餘剰價値、絞取は其結果に外ならぬ。「富（ライヒテウム）」なるものは人間及び事物に對する統治であり、過去の財産制度は「暴力財産」である。

デューリングは「個性的社會性」personalistische Socialität が社會制度の基礎とならねばならぬと唱道する。個々の人格者が共同の勞働に依つて低級の生活方法から高級の夫れへ進むところに社會生活の基礎がある。個性的社會性は當然に反

モナルキィであり、相續制度に敵對するものであり、また宗教を否定するものである。何となれば在來の宗教は階級的のものであつたから。個々人の要求を滿足させるには單に身體の自由のみにては足りない。必ず經濟上の不可侵を持たねばならぬ。其前提は生産資料を何人も自由に使用し得るに在る。移轉の自由と同じく勞働權を何人にも認めねばならぬ。「勞働者の社會化」が新社會の根本である。

デュリングは代議制を以て「議會の遊戯」として斥けたが、勞働者のみの組織する議會といふ制度を考へた。要するに人類の物質的進歩は個性的社會性を基礎とする勞働者の社會に於てのみ到達し得ると謂ふのである。

（大正九年六月　先驅）

四 ブレスコウスカヤ女史傳

（一）

露國の革命は此世紀の驚異である。新しい社會史の第一頁である。然し此革命は決して一朝一夕に成つたので無く、多くの革命家の流した血の結晶なのである。露國の革命史を繙く人は其殉難者の無數なることに驚き、また其熾烈な社會奉仕の精神に感動するであらう。殊に革命の業に身を投じた多くの婦人の壯烈は人を動かす。アレキサンデル二世の暗殺に際し信號の役を勤めたソフィア、ペロヴスカヤ女史、秘密印刷所に於て探偵を防がんが爲めにピストルを携へて立番をしたイワノフ孃、自ら探偵に扮して多大の功績を現はし遂に眞探偵の發見する所となつたレスーボチン姉妹、警視總監トレポフ將軍を暗殺したヴエラ、ザッシユリッチ孃等は其尤なるものである。ここに掲ぐるブレスコウスカヤ女史も亦其一生

を革命に捧げ「露國革命の祖母」の名を謳はれる人である。彼女は一九一九年を以て七十五歳の齡を迎へたが、今も其青春時代に於けるが如く露國及世界の民衆のために彼女の美しい魂の全部を捧げてゐる。昨年末渡米の途次に彼女は我が東京をも訪問したが、其時、彼女が新聞記者に語つた「神を父とし世界を家とし人類を同胞とす」の一句は心ある人の記憶するところであらう。——私は明日の社會に於て女子を緊縛する今日の鐵鎖が解き捨てられ、人として母としての充分の生存が保障せらるることを信ずる。然しそのためには女子自ら要求するところ無くてはならぬことも信ずる。これ玆に「露國革命の祖母」の小傳を誌るす所以である。

（二）

エカテリナ、ブレスカウ、ブレスコウスカヤ女史は一八四四年にヴイテブスク

州に生れた。恰も農民解放に先つこと約二十年、ヘルツエン、ツルゲネーフ、パクニン、ビリンスキー等の戰士が改革の巨鐘を打ち鳴らしてゐた時代である。母は貴族の出身であり、父もポーランド貴族の出である。父は廣潤たる自由主義的感情に滿ちた男子であつた。父と娘とは共に熱心に社會科學に關する書籍を讀み耽つた。ブレスコウスカヤ女史は十六歳にしてヴォルテールやルッソオやヂデロを讀み、心から佛蘭西革命を理解した。——かくの如き教養の下に育つた彼女が野蠻な露國の政治組織を呪詛するに至るは當然である。彼女のプロパガンヂストとしての生活は二十六歳を以て始まる、一八七〇年早々キエフの一秘密結社に加はり、「人民の中に行く運動」の始るや、直に之に加つて村より村へ旅を續けた。七〇年代に於ては實に教育ある二千人近くの青年が民衆のなかに入つて宣傳に從つた。彼等は百姓の衣服を身に纏ひ、百姓の言葉を學び、百姓と一しよに勞働し食事を共にした。夜になれば集會が催される。熱心な宣傳が始まる。農民が眞に自

由の身となりて生活せんには彼等自身土地を所有せねばならぬ。地主階級を絶滅し眞に勞働する彼等自身のみ土地を所有すべきである。斯く語りつつ、宣傳者は懷から主義宣傳のために書かれた童話を取り出し、自由の如何に愛すべきかを說明する。農民の瞳は異常の熱心を以て此神秘な物——本を見つめる。……かやうな光景が露國の農村の至る處で演ぜられた。彼等は愛誦の書を賣り、衣服を賣り、寶石を賣つて資金を整へ運動に從つたのである。ブレスコウスカヤ女史の熱と力とに溢るる宣傳は深い感銘を與へずにはおかなかつた。

(三)

智識階級の運動が熾烈であればあるほど、官憲の壓迫は暴惡さを增した。逮捕と監禁と追放と死刑は相次いだ。ブレスコウスカヤ女史亦捕へられた。而して一度釋放せられたが再び捕へられて簡單な、不條理な裁判ののちにシベリアへ追放

せらるるに至つた。露國の政府は革命主義者を大抵シベリアへ送つた。智識階級の無數の戰士はシベリアの荒野に或は死し或は長い生活を送らねばならなかつた。其追放の光景の悽慘なるは想像以上である。女史は語る。

「私たちは深夜に引き出されて町はづれに待つてゐる大きな橇に積み乘せられた。私たちは囚人服を着せられ、足にも手首にも重い鎖が結ばれ、頭髪が半分づつ剃り落される。三頭の馬が橇をひく。シベリアへの五千哩の旅が始まる。……夜になると、私たちは路傍に設けてある小牢へ投げ込まれる。其小牢にはチブス患者か壞血患者も一しよに押し込む。夜を通じて手錠と足械の鳴るをきく。婦人の呻くをきく、病兒の泣くをきく。壁上にはナイフで刻まれた無數の彫りあとがある。それは私たちより前にシベリアへ行つた友人の刻みしものである。其跡はまざ〳〵と新しいものもあるが、もう一世紀も經つたであらうと思はれるほどの蟲ばんだ詩の斷片がある。……かくの如き悲慘な生活も私たちの夢を破るに足りな

かつた。私たちは外部の生活に心を動かさるる處無く熱心に未來を語つた。同志の人々は秘密に見送りにきた。私は實に如何なる個處に於ても希望に滿たされた。……」

（四）

彼女はカラ鑛山に送られた。其勞働は激烈であつた。彼女は逃亡を企てたが再び捕へられて苦役の度を增した。ブレスコウスカヤ女史がシベリアで如何なる生活をしてゐたかはジョージ、ケンナン氏の「シベリアと追放制度」のなかに詳しい。ケンナン氏はブレスコウスカヤ女史の教養の深さと、革命家としての英雄的氣魄に驚嘆した。同書は女史の印象を記して曰く、

「女史は三十歳ほどの婦人であつた。彼女は强い、智識に溢れた顏を持つてゐた。其顏を流るるものは女らしい優しみでは無くして、天才的な熱情的な氣分で

あつた。様々の受苦は彼女の顔を嚴しく見せた。短く束ねられた薄い黒い髪はこかしこに白髪をまじへてゐた。如何なる迫害も彼女の名譽と義務との感情を破ることは出來なかつた。彼女はフランス語をもドイツ語をも英語をも話し、また音樂にも長じてゐた。かくの如きはシベリアに於ける私の長い旅に決して發見する能はざりしところである。彼女は生涯監禁の身であつた。彼女の家族も友人も一生中、彼女から分離せられる。然し如何なる迫害も祖國の自由に對する彼女の信仰を破ることが出來ぬ。彼女は最後に私に向つて「ケンナン氏よ。私たちは追放に於て死するであらう。私たちの子供もまた同じ運命に於て死するであらう。其子もまた同樣であらう。然し最後には必ず何物かゞ到來するであらう」と言つた。此語は私の終生忘るる能はざるところである。

（五）

ブレスコウスカヤ女史は一八九六年に釋されて露國へ歸つた。シベリアに幽囚せられたること實に二十三年間である。彼女は直に再び社會革命黨に加つて革命運動に從つた。一九〇四年にアメリカへ渡つたが、一九〇五年の革命勃發するや直に同志と共に秘密に歸國し、運動に從つた。人の知るが如く一九〇五年の革命運動は今にも全露國を崩壞せしむべく見えたが、日露戰爭の終結と共に甚だ呆氣無く終つた。コサック兵の銃火は革命者の集團に降り注ぎ、捕へられた人は死刑其他の極刑に處せられた。女史亦捕へられたが、死刑を免ぜられて再びシベリアへ追放の身となつた。

（六）

終に一九一七年の三月革命が來た。專制政府は倒壞して革命露國の臨時政府が建設せられた。臨時政府は直に革命の祖母たるブレスコウスカヤ女史の歸國を促

す急電を發した。

革命の露國には種々の感動すべき光景が展開せられたが、ブレスコウスカヤ女史のペテログラード歸還の光景の如きは其最も美しきものである。如何なる花嫁も彼女の如く多くの花束を以て祝はれたものは無い。シベリアよりの長き旅行に於て至るところ多くの熱狂した群衆が待ち構へて彼女にウラーを浴びせた。彼女は至る處に解放せられた自由露國を、勞働者を、兵士を、市民を見た。——彼女を乗せた汽車は午前十一時にペテログラードに着いた。數千の群衆は刻々其數を增した。彼女をモスカウまで出迎へた時の法相ケレンスキーが彼女の手をひいて現れたとき群衆は全く熱狂して歡呼した。ケレンスキーは群衆に向つて言つた。「仲間よ、露國革命の祖母は今や自由の露國に歸つてきた。祖母のためにウラーを唱へやうではないか！」百雷の如きウラーの聲が起つた。數千の帽子が振られた。

喝采と歡呼とが耳を聾した。

其時、眞先に看護婦の一團が進み出た。代表者は花束と赤い革命旗を捧げて女史に近づいた。「革命の祖母エカテリナ、ブレスカウ、ブレスコウスカヤ女史に光榮あれ！敬愛する祖母よ、我等の卑しき挨拶を受け給へ！」花束は女史へ捧げられた。多くの人々が女史の手に接吻した。女史がケレンスキーに伴はれて自働車に乗るまでウラーの聲が絶えず響いた。自働車は直に勞兵會大會の會場へ急いだ。

革命の祖母來るとの報達するや勞兵會の人々は一齊に喝采した。女史の姿の現はれたとき、人々は起立して歡迎した。ケレンスキー及び勞兵會執行委員會長シヤイデの莊重な、誠意に溢れた歡迎の辭に次いで女史は答辭を述べるために起ち上つた。各員はすべて起立した。女史は言ふ。

「私はシベリアから長い途を通つて歸つてきた。私は老いて、すべてを精確に記憶することが出來ぬ。然し私は私の通過する途々、民衆を、勞働者を見た。私は今また自由の殿堂に入つて兵士を、勞働者を、コサックを、水夫を見る。かく

の如く全露の各階級が統一的に代表者を有するに至つたことは何たる幸福であらう。これ實に我々が一個人の如く統一的に自由に、樂しく行動することの可能を示すものである。

親愛なる人々よ。私は過去五十年間、革命の業に卑しき身を捧げてきた。私は誇張すること無く、私が私たちの義務と原則とに忠實であつたと言ひ得る。私は空論を避けて實行を重んじた。私は自己の快樂や利益を貪たことは無かつた。私は思ふ、御身たちは、すべて大なる母露西亞の子である。兵士も農民も勞働者もすべて同一である。然るに御身たちは何故に小さき論爭に戰るのであるか。私たちがすべて一樣に自由と平等とを熱望するならば相互の間の小さき差違は直に消滅すべきである。御身たちよ。何物も無代價にては得られない。過去三年間、露國は偏に苦痛を嘗めた。今は最後の決戰に入る時である。一致せよ、結合せよ、小さき差異を忘れよ、かくて最後の目的——全國民の自由と幸福とが到來するのであ

る。」

女史の演說が終ると喝采は雷の如くあがつた。諸種の階級の代表者は近づいて熱烈な挨拶を捧げた。

（七）

其のち女史はケレンスキーの政府を扶けて革命の完成に忙しかつた。勞兵會に、農民大會に女史の姿は常に見られた。然し一九一七年十月レーニン現れてケレンスキーを斃すや女史亦失脚して終に再び亡命の身となるに至つた。レーニンは最も純粹なる社會主義者である。彼はマルクス以下の諸人の構成した正統派社會主義の理論——無資產階級のみの手に依る社會革命を完成せんとするものである。彼の認むるは勞働者階級のみにして有らゆる社會階級を勞働者に還元せんとするものである。彼の爲さんとするは獨り露國民衆の爲めにのみする革命に非ずして

國際的社會革命である。その完成の過程として勞働者の專制を是認するものである。妥協と平和的手段とは其無視するところである。かく見來ればプレスコウスカヤ女史の亡命も亦已むを得ないのである。

革命は一朝一夕に成らぬ。多くの犧牲が必要である。プレスカウスカヤ女史の尊き、勇ましき、悲壯の一生は此大なる犧牲の一片である。革命家とは革命てふ唯一つの誓願を有する者である。彼は私の快樂、名譽、利益を冀ふことを許されぬ。此點に於て女史は實に典型的なる革命家である。今此老いた英雄的婦人は合衆國に至つて昔のやうに宣傳の業に從ひつつありときく。自分は遙に彼女の殘生が幸福であることを祈つて止まぬものである。

（大正八年八月　デモクラシー）

五　斷片集

◇優勝者の廢頽

餘りに肥沃なる土壤に生ふる植物は退化する。そは此植物がもはや爭鬪すべき何物をも有せざるに至つたからに外ならぬ。此法則は人類の社會史にも活潑に作用して居る。古來、俗世の優勝者は實は儚く、短命に、物哀しく必滅して行つた。

然しながら人類が植物以上の生物であることは疑ひない。人類の精神の內部には限りなき爭鬪の意思が燃え、善を愛する不滅の感情が湧き出でゝ居る。而も人類が彼の魂を有せざる植物と同じく優勝者廢頽の法則に支配されるのは何故である乎。卒直に謂へば、それは過去の優勝者が植物と等しき人間であり、人類そのものを代表する人間でなかつたことに原因するのである。

世俗優勝者の廢頽は悲劇や喜劇の材料となる。彼等が塵の如く消えやうとも吾

人の心は痛まない。吾人は眞に人類的なる優勝者の出現に待ち焦れる。

◇光を盜む

太初、地上には光が無かつた。人類は暗黑に閉され、寒氣に慄へ、蟲の如く生きてゐた。此時、半神プロメシウスは天の一角に赤く燃えあがる焔を見た。そはジユピターの神園に燃ゆる神火である。プロメシウスは決然として天に駈けあがり禁制の園より神火を盜んで地上の民に分ち與へた。光と熱とを得たる人類の生長は神をも凌ぐ。ジユピター神は怒つてプロメシウスをカウカサスの絶頂に鐵鎖を以て繫ぎ、鷲鳥の來つて其肢體を啄むに任せた。——

希臘神話の此物語は亦現代の我等にとりても深甚の感動を與へるのである。今、地上には自由が無い。自由は光である。自由は熱である。見よ、工場の高塀の中に、鑛山の暗き坑道に、自由を喪へる生產者の群の悲憤するを。我等が現代

のプロメシウスに對する要求は切實ならざるを得ぬ。

現實は紛糾と錯雜と混亂の巷である。現實の颱風は小ざかしき理知の小舟を覆す。我等のプロメシウスは放恣の空語に耽る思辯の徒に非ずして、熱情と勇氣との行動兒でなければならぬ。

カウカサスの殉難を悔いざるプロメシウス出でよ。光を盜め。此英雄に導かれて總ての人プロメシウスたれ。

◇人間の崇拜

人間を崇拜する感情は人間の歷史と共に古い。原始人が雷電、大雨、暴風の神祕な自然力の前に戰く瞬間にすら、此誇りある感情は消えざる火の如く彼等の胸に燃え上つてゐた。

人間が人間を崇拜した極みには、屢々其限界を跳躍して、人間中の或者を神と

見る觀念を發生させた事が有る。可憐の人民が國民的英雄、王、教主を神として崇拜し自らは奴隷に落ちた喜悲劇は、あらゆる民族の社會史の物語る所である。

人間は神ではない。彼等は如何に自讃しようとも天上の渺たる一遊星をすら動かし得ない。所詮、人間は人間として發達して行くところに其限りなき光榮が有る。

人間を崇拜する感情は今も暖く人間の心を流れる。自然に植ゑられた此感情が人間の進歩の貴い原動力であることは今も昔も變りはない。廢頽極りなき近代社會を呪ふ者は新に此感情を發見し展開させねばならぬのである。

◇生産者の世界へ

我々は生産の生活を崇拜する。怠惰な消費の幸福を嘲笑ふ。主人と奴隷との對立した一切の歴史形式の消え失せることが我々の努力の的である。

我々は生産者の世界へ直進する。そこには創造の欲望と歡喜とが藝術的に表現せられ、自由實り、正義が輝く。然しながら其れは極樂のやうに眠むたい享樂の世界ではない。そこには絶大の努力と訓練とが支配する。

生産者の世界は自然必至的に到來するものでは無い。人世は微妙で、歴史の進動は複雜である。赤熱の熔鑛爐「現實」は空想を許さない。自由人の王國は我々の努力する限りに於て可能である。

生産者の世界に至る絶對の前提は「我々は生産者なり」てふ階級感と連帶的情意である。されば我々は懶惰階級の編んだ在來一切の階級的宗教と階級的藝術とに反抗するのである。

近世社會學は階級團結の可能を教へ且つそれが新道德の基礎となることを示唆する。遙遠の古代に一度人類史の上に輝き、長き間我々の先達の憧憬して止まざりし生産者の世界は今、不死鳥フエニックスの如く、人類の新社會結合に於て蘇

返らんとする。我々の自由回復戰に絕大の意義あらしめよ。

◇自由戰爭

人間は爭鬪する生物である。人類の歷史は爭鬪の上に書かれた。

最も根本的の爭鬪現象は集團相互間の戰ひである。原始社會では食物探求や性慾の爲めに、文明社會では人間が人間の勞働力を掠奪する爲めに、決死的な團體的爭鬪が行はれる。此團體的爭鬪の慘酷さは遙に、爭鬪の象徵として考へられてゐる獅子や虎以上である。彼等猛獸は異種の野獸に如何に兇暴であつても、自群內部に於ては極めて樂しき平和を享樂する。

人間は獅子や虎以下のものであるの乎。否、吾人は人間の複雜な爭鬪が常に無意識裡に「自由の欲求」といふ微妙の契機に貫かれてゐるのを發見するのである。人間が自由を慕ふことは恰も空氣の間隙を追ふに似る。人間は一方に盛なる爭鬪

をなしつゝ、他方に善神の惡神征服、または釋迦の降魔といふが如き哲學的空想をする。爭鬪の歷史哲學は、爭鬪が常に一の自由戰爭であることに在る。

進化とは畢意、無意識なるものが意識化することに外ならね。自由の欲求を意識化し、爭鬪を完全に自由戰爭化するところに、爭鬪の進化があり、爭鬪者の職分が存する。

◇黃金慾の歷史哲學的意義

古獨逸の傳說に、世界の爭鬪と罪惡とは水の王國と光の王國との衝突から起つたもので、其原因は全く黃金にあつたと記したものがある。黃金が人類の歷史に作用した有樣は驚歎に値する。黃金慾の業火の燃ゆるところ、人間の心理は時として惡鬼と狂犬の如くなり得た。

然し黃金といふ呪はれた物を獲んとして狂亂した者共が主として支配者階級で

あつたことは大に注意の價値がある。黄金慾の歴史は滑稽で痛ましい。古代ゲルマニヤの酋長は、黄金作りの胸飾りや水瓶や角盃の蒐集に熱中した。やがて財寶の蒐集が金銀貨の蓄積や金塊の貯藏へ進化する。歐羅巴の王家は被征服者から、貴族は領民から、高僧は信者から、最後には黄金の形にする積りで、色々のものを絞り上げたのである。單純な財寶や金塊の慾望が決定的に金錢其者への慾望に移つたのは第十三世紀頃からでそれが亞米利加の發見や蒸汽力の發明に伴うて愈々深刻になり、現代人の心理に重大な影響を與へて居るのである。而して强奪や冒險や奇術といふ原始的な金錢獲得方法が捨てられ、「金錢に依る金錢獲得」といふ方法の完成したところに、現代黄金慾の歴史的特徴が有るのである。そこで此方法に最も巧妙で狡猾の天才を發揮する商人若くは企業家といふ社會群が新しい支配者となつて王や貴族や僧侶を一蹴し、所謂資本主義時代を展開させて居る次第なのである。

◇軍事型社會と産業型社會

社會組織は不動でない。社會は流動する。されば支配者階級が如何に熱烈に現狀維持を欲求しようとも、社會は江河の水の如く永遠不斷に流動し行くのである。

近代社會は抑も如何なる方向へ行かんとする乎。吾人は此處に近代社會學界の巨人スペンサーの斷案を抽き出さう。彼は曰ふ、社會は軍事型（ミリタント、タイプ）から産業型（インダストリアル、タイプ）へ進化しつゝあると。

軍事型社會では國家が個人を壓迫する。個人は國家の所有である。最重要の生活方面は戰爭にして勞働でない。勞働者は奴隷たるを常とし其地位は兵卒より劣る。反之、産業型社會は戰爭が止み産業が重きをなすに至る社會である。自由意思に基く協働と、自由なる人々の結ぶ契約とが其根本表徴である。國家組織に依り禁壓せ

られた大小の社會結合が其機能を發揮するに至る。更に一國内の經濟自給主義が止み、人類團結の機運が特定の形式にて促進さるゝに至る。……

軍事型より産業型へ。スペンサーの此命題は多量の一般的眞理を含むのである。近代社會は正に此兩極を彷徨するものにして或者は純粋なる産業型に直進せんとし或者は古き軍事型に執着せんとする。斯くて各種の社會的闘爭は激しからざるを得ぬのである。

◇左傾乎右傾乎

近代の經濟社會は支配者たる資本家階級と被支配者たる勞働階級とが露骨に相敵對する陣營である。前者は飽くまで後者の勞働力の上に眠らんとし、後者は此屈辱に深酷の復讐心を抱く。前者の心理は保守にして後者の心理は急進である。此保守と急進との軋み合ふところに近代社會の和睦し難き裂け目が横はる。

此裂け目は資本家相互の欲望の衝突する時、一層擴大する。資本家が勞働者を奴僕視するは近代社會の自明の原理である。資本家は飽くなき支配慾から更に他の資本家を斃さんとする。資本家相互の決闘が初まる。而して其戰は慘憺たる恐慌となつて現れ、餘波は忽ち勞働者を襲ふのである。此時、勞働者階級の心理は一層急進的となる。

此時、保守と反動とが洪水の如く全社會を蔽ふ。相戰へる資本家は共同の敵の攻撃に狼狽しながらも猛然として反撃するのである。此洪水の前に或る勞働者は勇氣を喪ひ或る勞働者はデカタンとなる。然るに或る勞働者のみは意氣益々昂る。戰闘は複雜となる。

奇怪なる哉、近代社會。而して日本の今日は正に此狀態に在る。我が親愛する日本の勞働者階級よ。卿等は右せんとする乎。左せんとする乎。

◇政黨戰と勞働果實全收權

政黨は必然に階級的利益を代表する鬪爭團體である。政權の爭奪が其手段である。

總ての爭鬪には勝利者と敗北者とが有る。政黨戰の勝利者の內在目的は能ふ限り自ら勞働せずして國民的生產物を最大限度の分量まで享樂するに在る。政權は其道具となる。貴族が政黨戰に勝ちたるとき國家を莊園と見做し、ブルジョアジーの勝つとき國家を工場と心得る。

近世の勞働者階級も立憲政治の華美な外觀に眩惑されて一時、政黨戰の舞臺に立つた。併し彼等は直ちに此封建的殘壘が「生產者のみ生產物を全收すべし」てふ其階級的宗教を貫くべき眞實の戰場で無いことを覺醒し、直接に純經濟的改革の必死的爭鬪を開始した。此基本的戰爭の價値は社會の進化を決定すべく政黨戰に優

ること絕大である。

斯くて議會は本來の意義を失ひ、一の遊戲場化しつつある。此遊戲場がブルジョアジーに獨占されようとも、少しも悔ゆることは無い。

社會制度の諸研究終

大正十年十一月廿七日印刷
大正十年十一月三十日發行
大正十一年四月一日再版
大正十一年十月一日三版

社會制度の諸研究叢書
正價金貳圓四拾錢

著作者　佐野學
東京市神田區西紅梅町十二番地

發行者　大島秀雄
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者　鷲見九市
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍工場

發行所　同人社書店
東京市神田區西紅梅町十二
電話神田二九六九・振替東京二七〇六五

大賣捌所　東京　東京堂、東海堂、北隆館、栗田　大阪　登美屋
京都　東枝、名古屋　川瀬

同人社

不許複製

同人社發賣書目

佐野學先生新著

日本社會史序論

（四六判四百頁麻布裝上製）

定價二圓三拾錢
送料書留十五錢

在來の歴史書は政治史に過ぎない。治者群は政治を、被治者群は勞働をする。政治は重要な社會現象ではあるが勞働の生活がないならば、社會生活は成立しない。眞の社會史が編まれるためには被治者群の勞働の歴史が明かとならねばならぬ。埋沒された人民の歴史を發掘し、現代への連鎖を辿ることは現代社會の性質を正しく理解する所以であると共に、將來の社會進化の方向を知る上に多く貢献するであらう。＝著者＝

上古以來、史家から多く顧みられなかつた我國民衆の生活史を明かにした本書の明示し、暗示する所こそ、正に開拓せらるべき歴史の新らしき曠野でなければなぬ。

著者	書名	内容大意	裝幀	定價	送料
森戸辰男	クロポトキンの片影	自然科學者、社會科學者として、祖國と民衆とよりも、クロポトキンの熱愛者の人道的半面に重きを置き、主義者として高き人の評傳。雅なる名品。	四六判 二百頁 函麻布入	一、六〇	一二
權田保之助	民衆娯樂問題	社會生活の變遷に伴れて民衆娯樂の推移發達の跡を叙し、明快なる論斷を下す。教育上類書なき快著。社會を供する資料豐富なる。	四六判 四百ポイント頁 函麻布入	三、〇〇	一五
北澤新次郎	新社會の建設	ブルヂョワ文化の後に生るべき勞働者の集團的運動を中樞とする合理的な新秩序文明になる社會的建設的論策である。	四六判 三百頁 函麻布入	一、九〇	一五
佐野學	社會制度の諸研究	制度事物の本質は其原初に遡つて發生論的研究に俟つ外はない。此見地から社會制度の全般に亘り眞摯なる社會學的經濟史的研究を試み批判を加へたるものである。	四六判 四百五十頁 函麻布入	二、四〇	一五
佐野學著	日本社會史序論	在來の歴史は特權階級の歴史に過ぎない。上古以來歴史から忘れられた被支配者階級の生活史を描いた最初の國民史こそは本書である。	四六判 四百頁 函麻布入	二、四〇	一五
林癸未夫	産業民主主義運動	産業民主々義運動こそは來るべき新時代の序曲である。大戰末より最近時に至る世界各國の勞働運動に就ての嚴正な批判論述は之を本書に求めよ。	四六判 五百頁 函麻布入	二、五〇	一、一五

論集書目

著者	書名	内容大意	裝幀	定價	送料
ビアトリス・ポッター原著 久留間鮫造	消費組合發達史論 （英國協同組合運動）	原著は消費組合運動の祖國英國に於て之を最初に學問的に取扱へる歴史的名著である。該運動の發達と其使命を眞に理解し得られるもの。譯文は正確にして明快暢達、高野博士の指導の下に成る。（大原研究所叢書第四）	四六判 三百五十頁 麻布裝 函入	二、〇〇	一五
横田英夫	現下の農民運動	地主對小作の紛議は全國に起つて居る。本邦農民運動の現狀と其將來に對する適切なる批判を聽け	四六判 三百頁 麻布裝 函入	一、二〇	一〇
末弘嚴太郎 草野豹一郎 吉野作造 穂積重遠	新興文化と法律	法律學に於ける新浪漫主義（末弘博士）公判言渡の公開と公表（草野學士）法律に對する世俗の考（吉野博士）法律に現はれた維新の氣分（穂積博士）等法律の社會的意義を說く	四六判 百二十頁 並製清楚	、六〇	、〇八
土田杏村 大山郁夫 長谷川如是閑、矢口達 今中次麿 吉江喬松 北澤新次郎 諸氏	社會思潮十講 （建設者同盟講演集）	新國家學概論（大山）苦痛に生きんとする藝術（長谷川）性的社會問題（矢口）代議制度論（今中）文藝と佛文明（吉江）ギルド社會主義（北澤）文化主義哲學（土田）日本階級鬪爭史（佐野）勞農文化（平林）農村問題（中澤）	四六判三百五十頁 並製清楚	一、五〇	、一五
麻生久編	新社會的秩序 （櫻橋小虎紀念論集）	米田庄太郎、大山郁夫、長谷川如是閑、高野岩三郎、上田貞次郎、山川均、堺利彦、片上伸、末弘嚴太郎、阿部磯雄、新居格、北澤新次郎、佐野學、諸氏の名論文を選輯。	四六判 六百頁 並製清楚	一、五〇	、一五

大原研究所年鑑

著者	書名	内容大意	裝幀	一定價	送料
大原社會問題研究所	日本勞働年鑑 第參輯（十一年版）	勞働組合、勞働運動、勞働爭議、勞働狀態、失業問題、福利施設、社會保險、教育問題、社會主義、勞資協調、農村問題、女子職業、俸給生活、住宅問題、生活費、勞働移民、國際勞働、勞働立法、政治一班、財政經濟一班等凡てを網羅す。	菊判六百餘頁假綴ポイント三段組	三、〇〇	二四
同	同 第壹輯（九年版）	同	同	三、八〇	二四
同	同 第貳輯（十年版）	同	同	四、五〇	二四
同	日本社會事業年鑑 第貳輯（十一年版）	社會事業、軍事救護、民力涵養、方面委員、細民部落、失業保護、幼兒母性保護、少年法案、盲啞保護、免囚保護、公設市場、住宅問題、公益質舗、簡易保險、八事相談、青年團、圖書館事業、感化事業、貧兒教育、衛生救療等を網羅す。	菊判三百八十頁假綴	二、〇〇	一五
同	同 第壹輯（九年版）	同	同	一、八〇	一五
同	同 第貳輯（十年版）	同	同	二、五〇	一五
同	日本社會衛生年鑑 第三輯（十一年版）	人口概要、公衆衛生、種痘水道、社會保險、共濟制度法令、工場衛生、鑛山衛生學校衛生、軍隊衛生、交通衛生、監獄衛生、重要疾病と施設、其他社會衛生に關する重要問題を網羅す	菊判三百五十頁假綴	二、〇〇	一五
同	同 第壹輯（九年版）	同	同	二、二〇	一五
同	同 第二輯（十年版）	同	同	二、五〇	一五
大林宗嗣	幼兒保護及福利增進運動	大原研究所叢書 第壹	菊判百五十頁假綴	一、五〇	六
暉峻義等	乳兒死亡の社會的原因考察	同	菊判八十頁假綴	八〇	四
大林宗嗣	ソシアルセツツルメント事業の研究	同	菊判百頁假綴	一、〇〇	四
大林宗嗣	民衆娯樂の實際研究	同 第五	近刊		

新刊

森戸辰男譯

ゾムバルト原著

（四六判三百頁麻布裝函入）

勞働組合運動の理論と歴史

定價　二圓

送料書留十五錢

勞働組合を論ずる者は直ちに英のウエッブ、獨のブレンターノを想起し、併せてゾムバルトを忘れてはならぬ。ブ氏が民主々義自由主義思想の社會政策學派の人であるに對し、ゾ氏がマルクス流の社會主義學派に屬するは遍く知らるゝ所。原著は氏の名著「十九世紀に於ける社會主義及社會運動」と共に近世社會主義並に社會運動の意義と重要とを明かにし、其卓越せる識見と奇警なる着眼と流麗なる才筆とを通じて氏の進歩的思想を窺ふことができる。（大原研究所叢書第七）

50 2
284

終